

図書ニユース

第4号

2006. 10. 7

大阪府立北野高校 図書館

今・・・試験も終わって、ほっと一息している時期。あの夏の暑さがちょっと懐かしいなと思っている時期。1年生は、‘入学した4月から数えたらもう6ヶ月が過ぎてしまったな’と思っている時期。2年生は、‘高校生活もちょうど半分終わってしまったな’と思っている時期。3年生は、‘高校生活も残りもう半年を切ってしまったな’と思っている時期。そんな時期は、不思議と「もの思う」時期。自分のこれまでと今とこれからを見つめてみたくなる時期。こんな時期は、ドーンと覚悟を決めて、深く深く自分と向き合ってみるのもいい。でも自力で戻ってくるのはちょっとしんどい。そんな時、映画「耳をすませば」の〈聖司君のおじいさん〉みたいな人がいたらいいよね。私も若いとき、ちょっと背中を押してくれる素敵な〈誰か〉がいたらいいなと思った。

〈聖司君のおじいさん〉みたいな素敵な本を、〈YA新書「よりみちパン！セ」シリーズ〉から何冊か紹介します。書き手は、私も若いとき出会いたかった『まっとうなおとな』たちばかり。今私も、おとなと言われる年代になって、『まっとうなおとな』になっているかなと自問しつつ読んだ本ばかりです。

〈YA新書「よりみちパン！セ」シリーズ 理論社刊〉について

中学生以上すべての人に向けて、読みやすくコンパクトなかたちで書き下ろした ヤングアダルト Y A新書と銘打って出版されているシリーズです。あまり本を読んだことのない人にもお薦めです。字が大きくふりがなもついていて、読みやすくわかりやすく、でも内容は深い。『まっとうなおとな』たちである書き手が、まっとうに書いているのだから当然といえば当然。

「よりみちパン！セ」シリーズの書き手の方々について、糸井重里さんがこんなことを言っています。「よりみちパン！セ」シリーズの特徴がよくわかるので紹介します。

「これはぼくの想像だけど、著者のみなさんは、何かを救っているんだと思うんです。いまの、たとえば14歳を救っているんじゃないくて、自分の14歳だった時代を救っているんじゃないかな。いわばここにそろってる人たちって、多感な人たちだったでしょうから。子どもから大人になるときに、ぜったいに苦しんだと思うんですよ。そのときの自分を助けてあげるのが大人になった自分なのかもしれない。」

「ぼくは、子どものころにたのしくてしょうがなかったか、というと、そうじゃない。さなぎから羽が出るくらいの時期って、無力感と、「大人にならなきゃいけない」という嫌さの、両方がありました。あの時代の自分に向けて、「よし、こっちにつかまれ!」と、書き手のみなさんが言ってるような、そんな気がします。」

(HP「ほぼ日刊イトイ新聞」より抜粋)

著者の徳永進さんは、ホスピスケアのある、「野の花診療所」の院長先生。生と死が毎日隣り合わせの職場。中学2年生の夢二に、院長の仕事、診療所のみんなのこと、そこで起きていることをすべて見せていく。回診のときも往診のときも、診療所のお祭りのときも、霊柩車と救急車が同じ晩に来たときも、ずっと夢二は院長と一緒に。読みすすめながら、**夢二と一緒に、生きることと死ぬことを、ともに考え体験できる。**

診療所には“あさってとボストンバック”という不思議なことばを残して亡くなった高2の鈴木君がいた。谷川俊太郎さんが、鈴木君になったつもりで夢二に語りかけた詩が、この本の最後を締めくくっています。

「やりたいことが見つからない」「自分に向いている仕事かわからない」・・・わからなくてあたりまえ、というところから、この本はスタートする。「やりたいこと」は「出会うもの」・・・本当にやりたいことってなんだろうと悩みながらもあきらめず、探し続け、とにかく歩き続けてみると、出会えたりする。『誰にでもわかることから、何も新しいことは生まれない』と、玄田さんは言う。自分の目と耳と口と足とで情報を集め、自分の頭で考え、歩いていく。『**自分のボスは自分**』なのだ。それが「仕事道」。「仕事道」に必要なのは、『**ゆるやかな人とのつながり（ウィークタイズ）**』をつくっていくことと、〔まじめ〕だけじゃない、〔肩の力を抜く〕だけでもない、『**ちゃんと、いいかげんに生きる**』ことが何よりも大切と玄田さんは言う。なるほどと、超納得。今わからなくても、必ずわかる時が来るすごい言葉だから、心にちゃんとしまっておくことをすすめます。

子どもの質問に答える形の構成。「バカの壁」、「逆さメガネ」よりわかりやすい、というより歯切れがいい、というより半分は怒っている。子どもは最も自然に近い存在なのに、子どもらしくないから、子どもらしくなくした大人たちに怒っている。「とにかく言っておかないと！」という感じで、迷いのない答え方が心地よくかっこいい。「超おとな」の風格がある。脳がちゃんと働いているということは、入出力のループをまわすこと。入力はいろいろな刺激（見たり、聞いたり、感じたり・・・）。じゃあ出力は？？？。筋肉の収縮、つまり運動というひとつだけしかない。今の社会、なんでもスイッチひとつでできてしまう。体を使うことが少ない。入力の種類もかぎられている。入出力のループがうまくまわらない。

よって、養老さんの結論・・・『**参勤交代みたいにみんなある一定期間、田舎に行けばいい・・・**』体を使わないと生きていけない状況で生きてみる。頭でばかり理解するんじゃなくて、体を動かして、肌で感じていくことが本当に今、大事。

* 男子のための恋愛検定 伏見 憲明

アニキなおとながいてくれる、とうれしくなる本。男子のためのと銘うってあるけれど、女子だって読める。男子とあるのは、これまで男子がまっとうに、真面目に楽しく堂々と、恋愛からセックスについてまで読めるものがあまりなかったからだと思う。

あなたの「恋愛力」を試す「恋愛検定テスト」からスタートするが、これが結構、哲学的な力と実用的な力を試され、四苦八苦すると思う。上級、黒帯をとるのは、かなりむずかしい。

『恋愛とは、1人の相手に気持ちがロックオンしてしまう原因不明の症状で、八百屋に行って、一山200円のじゃがいものざるの中から、1つだけどうしても無性に欲しくてしょうがないじゃがいもが見いだせるような、珍妙な熱狂』なのだけど、『少しばかりの“ときめき”を交換して終わってしまう、使い捨てのような恋愛』は、したくないというあなた、アニキなおとなである伏見さんの門をたたいてみてください。

* だれか、ふつうを教えてください！ 倉本 智明 081 - Y1 - 1-7

倉本さんは、20代前半までを弱視者としてすごし、現在はほぼ全盲に近い方。倉本さんのお話は、気づけば「ふつう」の話ばかり。「ふつう」ということに気づけるためにはどうしたらいいのか…。倉本さんは、自分のかたわらにいる人との関係をどう作っていくかだと言う。

『大切なのは、「自分は相手のことをわかっていないんだ」ということをちゃんと知っておくこと。「わからない」ということをわかっていれば、相手のことばにしっかり耳を傾けることもできる。しっかり耳を傾ければ、わからないことも少しずつわかってくる。このことは、障害者との出会いだって、健常者同士の出会いだって、まったく同じ。わからなければわかろうとするけれど、わかった気になると、そこから先へは進めなくなる。わかっていないというその事実こそが、人を出会わせ、交わらせる原動力なのだ。』

* いま生きているという冒険 石川 直樹 081 - Y1 - 1-8

石川さんは29才。彼の「旅」はハンパじゃない。高2でのインドへの旅をスタートに、アラスカのユーコン川下り、アフリカ、北極点から南極点への縦断、チョモランマに、七大陸最高峰登頂、ミクロネシアでの星の航海術体験、そして熱気球。もちろん日本も。でも石川さんは、自分が冒険家と呼ばれることに違和感を抱くと言っているのだ。じゃあ、どうしてこんなに「旅」を？ 石川さんの答えは。

『旅に出るというのは、未知の場所に足を踏み入れること。知っている範囲を超えて、勇気を持って新しい場所に向かうこと。それは、肉体的、空間的な意味あいだけでなく、精神的な部分も含まれる。旅人は常に少数派で、異邦人で、自分の世界と他者の世界のはざまにあって、様々な状況で問いをつきつけられることになる。現実に何を体験するか、どこに行くかということはさして重要なことではない。心を揺さぶる何かに向かいあっているか、ということが最も大切なことだ。』

「今生きている」という“問い”に向かって“応え”をつかむこと、それが「旅」それが「冒険」。窓から見る空、緑、学校の友達…。そこに毎日ぶつかること、想いをはせること…。そこに「旅」「冒険」への通路がある…。

伏見さんが小学校6年生の時うけた、「無視」といういじめ体験の話から始まる。1週間ですそれは止むのだが、その体験は当時の伏見さんの心の中の風景を一変させる。自分と世界の間にぎっくりと亀裂が生じたのです。『自分がいなくとも世界は当たり前のように回っていくし、何も問題を生じない。しかし悲しいことに自分はそうした世界の中でしか生きられない。』自分と世界の裂け目に、どのようにどんな橋を架け、自分の「生きられる場」を作っていくか。伏見さんは、当時感じた“さびしさ”を手放さずに抱えて、ずっと歩いてきた。

伏見さんの語る『“さびしさ”の授業』の中には、映画「シックス・センス」「千と千尋の神隠し」「X-メン」の話、「赤毛のアン」の話が出てくる。「生きられる場」を作っていくヒントをたくさん教えてもらえる。身近に、「生きられる場」を作るヒントはたくさんあるんだということにも気づけます。

スーパーに並べられている「パック入りの豚肉」の前をたどると、「生きてるブタ」だったことは誰でも知っている。でもその「生きてるブタ」を、どこで、だれが、どのように「パック入りの豚肉」までにしたかは、ほとんどの人は知らない。知ろうとも思わないでいる。でもそれを知ると知らないとは大違いなのだ。どう大違いなのかは、森さんの話を読んでください。

森さんの話は、屠殺場の話から、部落問題、戦争の話まで広がっていく。読み終わった後は、「知ることの大事さと、責任」を強く感じる。無知であること、無自覚であることが、自分の生命や生き方を傷つけるだけでなく、他者の生命や生き方をも傷つけかねないのだ。

家庭科の食の授業で、「血の一滴まで生かす」というVTRを見た人は、ドイツのビュットナ一家のブタの屠殺方法と、この本に出てくる現在の屠殺場での屠殺方法が全く同じだ！と驚くはず。食べるということは、他の生命をいただいて自分の生命にさせてもらうこと。それ故に、ブタが最も苦しめない方法で、またおいしくいただける方法で屠殺しているのだということにもあらためて気づかされます。

この夏は、靖国の問題、憲法の問題が新聞に載らない日はなかった。実態の感じられない愛国など国家などのことばが、シャボン玉のようにあちこちを飛びかっていた。一方、十三で「蟻の兵隊」という映画が上映されていたことは知っていただろうか。見に行った人もいるだろうか。そんな今だからこそ、今読む本だと思う。

「日本という国」を知り、考え直す旅に出ようという書き出しでこの本は始まる。前半で明治のことが、後半で第二次世界大戦後のことが書かれている。明治は「大日本帝国」という国、第二次世界大戦後は「日本国」という国の建国時代。どちらも国家の基本的な仕組みができあがった時代。その時代のことをしっかり学ぶことで、今とこれからを考えることができる。

『いのちの食べかた』の著者、森さんが言っていた、「知ることの大事さと、責任」ということ、この本でも再認識できます。